

編集後記

私が初めてプログラムらしきものを作ったのは、8ビットCPUのZ80が載ったマイコンだったと思います。小学生から高校生までの間、Z80はソフトもハード(自作)も遊びたおしました。当時のCPUは動作クロックを数えるのが楽だったので、機械語で作ったプログラムのループのクロック数を数えては、フロッピーディスクの回転数に間に合うようにカリカリに最適化してみる、といったこともやりました。後にi8086やV30でもアセンブラで似たようなことをして楽しんでいました。今思うとずいぶん生産性が悪かったのですが、当時は本当に楽しかったです。最近のCPUは、パイプラインやらキャッシュやらで、実際のクロックを机上で数えるのが難しくなりました。仕事ではもっぱらC/C++を使っているのですが、昔の癖なのか、ソースコードを書きながら「この分岐は飛んだ方が速いのか」とか「これだとレジスタ操作に無駄がありそう」などと、目的のためにはあまり重要でないことまで考えてしまいます。最近の高級なCPUと高級なコンパイラで育った若者は、いったいどんなことを思いながらプログラミングを楽しんで(?)いるのでしょうか。(H.G)

サイバーサイエンスセンターの真向かい(旧青葉山ゴルフ場)が、東北大学の新キャンパス用地です。昨年末から、本格的な整地作業が始まりました。3階から上のベランダで眺めると、毎日のようにその姿を変化させています。「こんなに広がったのか。」と職員が皆同じような感想を漏らしています。目前には、サッカー場や、野球場もゆったり造れる様な広々とした敷地がひろがっています。木々なども一部伐採されて、芝生も消え全体が土色になっている姿が現在は少しさみしくもありますが、環境調和型の新キャンパスに徐々に生まれ変わっていく姿を毎日みることが今後の楽しみとなりそうです。順調に工事が進むと、農学研究科や電気通信研究所等が約2年後には移転して来る予定です。ご近所になる部局の方に、今まで以上にセンターを利用していただければうれしく思います。(K.S)

SENACのサイズの変更について

昭和43年の発刊以来SENACのサイズはB5判を採用してまいりましたが、編集部会にて約半年をかけ検討の結果、時代の趨勢、執筆者の便宜等もかんがみ今号(Vol.42, No.1)よりA4判に変更いたしました。

SENAC 編集部会

小林広明 曾根秀昭 水木敬明 後藤英昭 江川隆輔
伊藤英一 加藤 昇 山内 斎 齊藤くみ子

平成21年1月発行
編集・発行 東北大学
サイバーサイエンスセンター
仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
郵便番号 980-8578
印刷 大成印刷株式会社